

## ボタンのかけ違いの話

がん治療の目標は「治る」ことにまっています。つまり病気自体無かったことになり、金輪際、病院に通わなくていいことです。しかし、じつはそこが医者と患者さんの間で最初にボタンのかけ違いが起こる最大のポイントです。医者にとってがんは早期がんを除いて、「治らなかつたり、再発することもある」ということは「言うまでもない」前提です。一方、患者さんからすれば「治る」ことこそが「言うまでもない」ことであり、どんな治療もそこから入っていきます。ことに再発がんの場合、お互いのズレが混乱を招きます。

患者さんはあえて「治るんですか」などと、恐いのもあって聞いたりしません。医者もわざわざ「治るわけじゃないですけど」などと前置きししません。それが思いやりでもあると信じているからです。希望を断ち切らないことも治療であると。治療が上手くいっているうちはいいのですが、効果が出にくい時期をいつかは迎えます。その時になって「もう難しいですね」と言われても「あれ、治してくれるんじゃないのですか？」とは聞けません。まるで冗談のように聞こえましたか？でもこれは案外珍しいことでもないのです。